

入院を必要としている子どもの保育に関する研究

原 田 知 佳

序 論

近年の小児医療の進歩は目覚ましく、以前は入院を必要としていた疾患が日帰り手術などの導入により入院をせずに、治療を行うことができるようになってきている。その一方で、難病とよばれる疾患の入院児は現在も家庭環境を離れ、不慣れな病院環境の中で心身ともに苦痛を与えられる処置を強いられてもそれに耐えなければならない。

病院は、本来病気を治療するための場所であるが、発達段階の子どもにとっては、大切な生活の場であり、発達を保障される場でなければならない。

近年、子どもの権利が大きく取り上げられるようになり、入院児の入院生活のQOL（Quality Of life＝生活の質）を保障しようとする動きが出てきている。その中で保育士の存在に注目が集まり、保育士を導入する病院が増加傾向にある。しかし、配置が進まないのが現状である。病院の中で入院児への保育を行っている保育士は通称医療保育士と呼ばれているが、確立された名称でもない。このような現状から、まだ認識が低く、多くの課題を抱えた職種である。

本論文では、わが国の病院の中で行われている保育の現状を正しく認識した上で、今後の課題について考察する。

第1章 わが国の小児病棟における保育士の現状

わが国の小児病棟へ保育士が導入されたのは聖路加国際病院が最も早く、昭和29年（1954年）である。全国の小児科のある医療機関に配置されている保育士は、「医療保育士」や「病棟保育士」などその呼ばれ方は様々であり、まだ専門資格として確立されていない職種である。

1. 病院での保育の現状

平成9年（1997年）に病棟の保育士についての全国調査を帆足が行っている。この調査によると保育士が導入されている病院の割合は、8.3%とわずかであり、入院中の乳幼児および病院への保育士の導入はきわめて遅れている。

こうした動きに対し、厚生省（現 厚生労働省）は、平成10年度（1998年度）に「病棟保母導入促進モデル事業」を創設し、「小児慢性特定疾患などで長期にわたり入院、療養生活を続ける子ども達にとって、医療以外の生活面を重視し、QOLを維持・向上させることは重要な課題である。こうしたことから、医療機関への保母（現 保育士）の配置を促進することにより、特に、親から離れて病院で長期にわたり生活している慢性疾患入院児等に対し、保母（現 保育士）による相談指導、遊びを通じた心身の発達の助長等を行い、児童の健全育成に資するとともに、家族との連絡・相談指導などを実施することにより入院児及びその家族の不安の解消を図る」とその趣旨を述べている。

また、平成12年（2000年）10月に厚生省（現 厚生労働省）が21世紀における母子保健事業の達成目標を定めた「健やか親子21」の中で、入院児のQOLの向上のために病棟に保育士が必要であることを指摘している。

そして、厚生労働省は平成14年（2002年）4月の診療報酬の改定・小児入院医療管理料の中で、「小児の療養生活の指導を担当する常勤保育士が病棟に1名以上配置され、30㎡上のプレイルーム（小児の成長に合わせた遊具・玩具・書籍等がある）設置条件。プレイルームは病棟内設置が望ましい」とし、1日80点の加算を新規導入した。このように、少しずつではあるが、病棟における保育士の重要性が認識されるようになってきている。しかしながら、全国調査からもみられるように、まだ保育士導入の数は少なく、十分ではないのが現状である。

平成13年（2001年）に、このような現状の中で活

動している保育士や、それに関心を持っている医療関係者によって、日本医療保育学会が発足した。日本医療保育学会では、全国研修会やブロック研修会を開催するなど、積極的な研修システムの構築に努力すると同時に、病棟の保育士の高度な専門性を証明するものとして専門資格の課題に取り組んでいるところである。

日本医療保育学会での『医療保育』の定義は「小児病棟や外来における保育、病児保育、あるいは障害児施設における保育等、医療と密接にかかわっている現場における保育をいう」である。

また、医療保育学会での『医療保育士』の定義は「保育士資格を有し、病児保育、外来保育、病（後）児保育、各種の療育機関（障害児施設等）、医療との接点が高い現場に勤務し、より高度な専門性を有する保育士。乳児院や乳児保育、障害児保育に従事する保育士も医療保育士としての専門性が求められる」である。

しかし、日本医療保育学会は現在、『医療保育士』という正式な資格名称を取得する申請を行っている最中であり、まだ認定された名称ではない。

2. 保育士の活動の現状

『小児看護』では、小児科のある医療機関での保育士の活動を2001年3月から12回にわたり連載している。それをみると、様々な勤務形態の現状の中であって、病棟の規模や疾患の専門領域が異なっても、活動の内容や保育目標に大きな差はない。保育士の活動は、入院児への保育であるが、その形態は様々で、特定の子ども1人を任されたり、病棟全体の保育士として配置され複数の子どもを担当したり、親が面会中、兄弟をみることもある。勤務形態は、毎日3交代勤務の病院もあれば、朝から夕方まで週に1~2回という病院もある。また、複数の保育士を配置しているところもあれば、1人のみというところもあり、病院によって勤務状況はさまざまであるというのが現状である。

3. 保育士の配置目的と役割

保育士の勤務状況はさまざまであるが、配置目的とは多くの病院で共通している。それは「入院児のQOL (Quality Of Life)の向上」である。QOLの概念は、1970年代にホスピスやがん治療の分野から医療に導入され、全人的な視点から人間存在を捉えようとしたものである。

入院児のQOLの向上とは、入院環境にある子どもの生活を保障することである。それは、保育所保育指針第1章1(1)の「子どもが、現在をもっともよく生き、望ましい未来をつくり出す力の起訴を培うこと」で掲げられている。この指針にある保育の目標は、すべての子どもに共通するものであり、例え入院環境にあっても、子どもは現在をもっともよく生きることができなければならない。

子どもが病気をして入院生活を経験することは、マイナスの経験ととられがちであるが、保育士が子どもの入院生活のQOLを保障することにより、他では経験できない貴重な体験としてプラスの経験へと転換していくことが可能になる。保育士は、子どもの心に寄り添いながら、子どもに適切な援助を行う役割を担ってほしい。

第2章 兵庫県立こども病院の保育士

兵庫県立こども病院の概要

兵庫県立こども病院は、小児治療が内科疾患を除いては、成人と同じ環境で診療がおこなわれている現状と、ますます進展しつつある専門化、細分化した医学を基礎として小児特有の検査診断、治療を行いうる小児専門病院の設置を望む社会的要請にこたえて、昭和45年に開設され、外来と一般外科主体病棟、循環器A病棟、循環器B病棟、学童主体病棟、内科外科混合病棟、血液主体病棟、ICU病棟、HCU外科系一般病棟、産科病棟、NICU病棟、GCU病棟の11病棟から成っており、病床数は290床である。

兵庫県立こども病院では、開設当初から保育士が導入され、現在に至っている。

現在、保育士は血液主体病棟に2名、循環器A病棟に1名、循環器B病棟に1名の計4名が配置されており、11病棟の中で3病棟に配置されている。

第1節 各病棟の保育士の活動と現状

1. 血液主体病棟

血液主体病棟の病床数は26床である。病棟スタッフは医師3名、看護師28名（看護長を含む）、保育士2名である。入院児の約80%が白血病入院児であり、0歳から18歳までが入院対象となっている。平均在院日数は20日であるが、治療自体は約20日入院し、自宅療養を約30日行い、また入院し自宅療法を行うということを繰り返し、それが約3年間続けられる。そのため、入院児は十分な家庭生活を送れず、多

くの制限の中で生活をしなければならない。特に、病院での治療中には抵抗力が落ちており、感染症にかかりやすいため入院生活や病棟内に多くの制限がある。

その中で、最も入院児がストレスを感じることは、長期間クリーンカーテンに入ることである。クリーンカーテンとはベッド全体を透明のビニールカーテンで覆うもので、きれいな空気が循環するようにつくられている医療器具である。クリーンカーテンに入っている期間は、排泄、入浴もクリーンカーテンの中で行われ、入院児はクリーンカーテンから一歩も外に出ることができない。

そのような環境の中で保育士は入院児が入院生活の中でも子どもらしい生活を送ることができるようQOLの向上を目的に配置されている。その他、毎日の実践の中で入院児の成長発達を家族へ返すことにより、保護者と共に入院児の成長発達を見守ることで保護者の支えとなる役割も果たしている。

保育士の保育対象となる入院児は0歳から6歳までであるが、学童とも積極的にコミュニケーションを図っている。

保育士は、1週間交代で乳児と幼児を担当し、保育内容を計画し、保育の実践を行っている。保育士が2名のため、1名が休みのときは1名が乳幼児全員を担当している。

看護師は、Aチーム（乳児）、Bチーム（幼児）、Cチーム（学童）にわかれ、それぞれ受け持ち制をとり、3交代制で看護を行っている。保育士は主にBチームとの保育カンファレンスによって入院児の情報を得ることにより、成長発達に合わせた生活援助や保育活動を計画している。

2. 循環器主体病棟

循環器主体病棟は、同じ階にあるがA病棟とB病棟の2病棟から成っている。病床数は各24床である。病棟スタッフは医師各3名、看護師各28名（看護長を含む）、保育士は各1名ずつである。

入院児の平均在院日数は14.6日であり、先天性心疾患の手術、心臓カテーテル検査、心不全の治療・コントロール等が入院対象となっている。入院児の大部分は医療機器（心電図計、点滴等）を身につけていることが多く、遊びの中であっても保育士は細心の注意を払っている。

循環器主体病棟は2病棟あるのにもかかわらず、プレイルームは2病棟でひとつしかないため、2名の保育士で両病棟の乳幼児の保育を合同で行っている。そのため、看護師をはじめとする病棟スタッフとの連携

は不可欠であり、特に保育士同士の情報交換等の連携は重要である。

病棟の保育士の1日の業務内容

- 8:30 ショートカンファレンス¹⁾に参加し入院児の状態を把握する。
- 8:35 プレイルーム、食堂、配膳室、保育室の環境整備を行う。
設定保育やベッドサイド保育の準備。
- 9:00 受け持ち看護師の判断により、プレイルームに来ることができる入院児の自由遊びの援助を行う。（看護師からその日の入院児の詳しい情報を得る。）
- 10:00 牛乳を準備し、必要に応じて入院児が牛乳を飲む際の介助を行う。
トイレへの誘導、自由遊びの援助を行う。
- 10:45 プレイルームにいる入院児に片付けを促し、トイレへの誘導を行う。
- 11:00 あらかじめ計画を立てた週案に基づいて設定保育を実施する。
①ベッドサイドの保育は、出来る限りプレイルームにいる入院児と一緒にやる。
出来ない時は、同じ内容の設定保育を午前中に個別で行う。
- 11:45 プレイルームにいる入院児に排泄と手洗いを促し、食堂へ誘導する。
昼食の準備と配膳を行う。
- 12:00 入院児の食事の介助・援助を行う。排泄を促し、歯磨きへの誘導を行う。
- 13:00 休憩
- 14:00 「家族と保母の連絡ノート」に午前中の入院児の様子を記入する。
設定保育や行事の準備を行う。
（木曜日 看護師との合同カンファレンスを行う。）
（金曜日 行事に向けて保育士会議を行い、計画を立てる。）
- 15:00 おやつ準備と配膳を行う。
入院児がおやつを食べる際の介助・援助を行う。
設定保育や行事の準備を行う。
（金曜日は次週の設定保育の週案を立てる。）
面会のない入院児がプレイルームで遊ぶ時は、保育士が援助を行う。
- 16:45 食堂に行く入院児に、排泄と手洗いを促す。

夕食の準備と配膳を行う。

第2節 保育の内容

1. 保育士の年間目標

保育理念

病棟スタッフと協力し、患者様一人ひとりの発達を理解し促進すると共に治療環境に早く対応できるように働きかける。

病棟スタッフとして互いの立場を認め理解し、医療チームの一員として連携を図る。

行事計画の目的

患者様の生活に変化や潤いや楽しみをもたらし、患者様とその家族の入院生活におけるQOLの向上を図る。

行事のねらい

- ・日本古来の伝統的行事を理解し、季節感を味わう。
- ・患者様が主体となり、準備を行う中で患者様の個性や特技などが発揮され、誉められることにより自信へとつながり、その発見が入院生活や治療に向けての重要な励みとなる。
- ・患者様とその家族と職員のコミュニケーションを図る。
- ・生活経験を豊かにする。

平成15年度 血液主体病棟 行事予定

5月	・こどもの日を祝う会 ・母の日の製作(第2週)
6月	・虫歯予防デー(4日) ・父の日の製作(第2週)
7月	・七夕まつり(7日) ・なつまつり(下旬)
8月	・お化けやしき
9月	・敬老の日の製作(第2週)
10月	・運動会 ・ハロウィン(31日)
11月	・作品展
12月	・クリスマス会(下旬)
1月	・お正月あそび(上旬)
2月	・節分(3日)
3月	・ひな祭りクッキング(3日) ・保育修了式(下旬) ※年長児が入院の場合のみ

(出典：兵庫県立こども病院「平成15年度保育士の年間目標」)

第3章 兵庫県立こども病院 (血液主体病棟)での実践研究

第1節 保育実践の内容とその考察

1. 季節の行事实践

(1) 虫歯予防デー

日時：2003年6月4日 11:00~11:40

場所：血液主体病棟内プレイルーム

対象：血液主体病棟の入院幼児

内容：設定保育のテーマとしてとり上げられていた。保育士がパペットを使用し、バイ菌が虫歯を作っていく過程を幼児に見せていた。そして、歯ブラシを使えば退治できることを教えていた。

考察：幼児自らがパペットのバイ菌を歯ブラシで退治する体験をすることで、パペットを自らに置き換えている様子で、歯磨き嫌いな幼児も歯磨きの大切さを理解していた。

(2) お弁当の日

日時：2003年6月18日 12:00~13:00

場所：血液主体病棟内プレイルーム

対象：血液主体病棟の入院幼児・学童

内容：保護者が病院食を各自持参したお弁当箱に詰め替え、プレイルームにピクニックシートをひいて、みんなで輪になって昼食を食べた。

考察：通常の病院食をお弁当箱に詰め替えたという環境の変化により、いつもはあまり食が進まない入院児も食が進みたくさん食べていた。このお弁当の効果には病棟スタッフ、保護者ともに驚きこの行事は成功であった。保育士は常に衛生面に注意を払い、保護者への指導も行っていた。

(3) 七夕祭り

日時：2003年7月7日 10:45~11:40

場所：血液主体病棟(幼児病室)

対象：血液主体病棟の入院乳幼児・学童

内容：歌“星に願いを”を全員で歌い、幼児が七夕の劇(ペープサート)を行い、乳児・学童が観劇していた。クリーンカーテンに入っている入院児がいたため、幼児病室で行われた。

考察：配役は劇を演じる幼児の希望で決定された。自分の意思をうまく表現できない幼児もいたが、本番では自分に与えられた役をしっかりと演じていた。設定保育での練習では、ビデ

オで劇を撮影し、みんなで見直してよりよくするための方法を考えていくという過程の中で「もっと声を大きく出した方がいいよね」「○○ちゃんはここに立ったほうがいいよ」など、積極的な意見を出し合っていた。その中で、保育士はまとめ役として機能していた。

(4) 夏祭り

病院全体の行事として、4名の保育士が中心となって企画・準備を行っていた。また看護師や看護学生もボランティアとして参加していた。感染予防のため2回にわけて行われた。

日時：2003年7月23日 (1) 15:00~15:45

(2) 15:50~16:30

場所：研修室 AB

対象：全病棟の入院児

内容：「金魚すくい」「フェイスペイント」「玉入れ」「くじびき」「手作りおもちゃ」がつけられた。入院児は入り口でチケットをもらい、各ブースを回っていた。各ブースで遊び終えた後に、手作りの景品をもらっていた。

実践：当日までに、保育士とともに景品作りを行った。筆者は当日、保育士とともに「玉入れ」の係りとして参加し、保育士が作成した手作りの玉入れを身に付け、曲にあわせて体動かし子どもの様子を見ながら、近づいたり遠ざかったりして、子どもがうまく玉を入れられるように動いた。

考察：各ブースの中で最も人気があったのは「金魚すくい」であった。その理由として、入院生活の制限として、生き物に触れる機会がないことが大きいと考えられる。入院児がすくった金魚は、希望者にはなつまつり終了後手渡された。「玉入れ」のコーナーでは学童はおもいきり玉を投げることを楽しみ、乳幼児は入れることを楽しんでいた。

(5) おばけやしき

多くの入院児が参加できるように2回行われた。

日時：(1) 2003年8月15日 (2) 2003年9月2日
10:40~11:45 (両日とも)

場所：血液主体病棟内プレイルーム

対象：血液主体病棟の入院乳幼児・学童

内容：プレイルーム全体を使用し、学童男子をお化け役にして、プレイルームにくることができ病棟の入院児全員が体験し、保育士が途中

においたペンをとって帰ってくるというルールで行われた。

実践：当日は保育士、学童男子とともにプレイルームをおばけやしきにする準備をした。全ての窓にダンボールをはって光が入らないようにした。そして、すずらんテープで出入り口をつくり、こわい雰囲気ができるように学童と一緒に考えて作り上げていった。

考察：幼児に対して事前に設定保育の中でおばけをとりあげ、学童に対してはおばけやしきの予告ポスター作成を通して、当日に向けて期待感をもたせていた。おばけやしきに入る入院児は、食堂（当日は食堂をプレイルームに換えていた）で事前に設定保育で作成したちょうちんをもって順番を待っていた。乳児は保護者と入室していた。前年はまだおばけやしきの恐さを認識していなかった乳児が泣き出す場面があり、情緒の発達を保護者、保育士ともに喜んでいた。

(6) 運動会

日時：2003年10月9日 10:40~11:45

場所：血液主体病棟全体

対象：血液主体病棟の入院幼児

内容：病棟全体を使用して行われた。幼児は保育士が作成した色とりどりのはっぴに着替え、各病室をまわり学童や乳児の保護者から指令の紙をもらって「体操“世界にひとつだけの花”」「カーレース」「玉入れ」「ハンバーガーはこび」「おみこし」の全5種目を行った。

考察：当日までの設定保育で5種目全ての練習が行われた。その中でも、「体操“世界にひとつだけの花”」の練習は保育士を見て、一生懸命覚えようとする姿勢が見られた。当日の入院児の事を考えて、なるべく点滴がとれるようにするなど、医療者の協力も積極的であった。当日は、入院児の状態に合わせ、点滴のとれなかった入院児には医療スタッフが傍にいるなど、全体を見る保育士と入院児個人を見る医療者の連携が見られた。

(7) ハロウィン

日時：2003年10月31日 14:45~15:10

場所：血液主体病棟、栄養指導課

対象：血液主体病棟の入院児（主に幼児）

内容：保育士が作成した仮想衣装に着替えて、幼児が血液主体病棟から栄養指導課におやつをも

らいにいった。その際、血液主体病棟入院児全員分のおやつをもらい病棟に戻るというハロウインの一連の流れを経験していた。

考察：当日までの設定保育の中で、ハロウインという行事の説明や、仮想衣装の本などを見せて、「どんな衣装が着たい？」ときいて、幼児はそれぞれ選んでいたが、中には大人から見るとハロウインの衣装ではあまり見かけないものを選ぶ幼児もあり、固定概念を持っていない姿がとても子どもらしかった。また、体調のよくない幼児もベッドから起き上がって興味を持っていた。設定保育では、それぞれ月や星の形のステッキを作成し、当日に向けて期待感を持っていた。

(8) クリスマス会

日時：2003年12月19日 個室10:00～ プレイルーム10:50～

場所：血液主体病棟内プレイルーム、各病室

対象：血液主体病棟入院乳幼児・学童

内容：10時より個室やクリーンカーテンの入院児のベットサイドで保育士と幼児がハンドベル「キラキラ星」「ちょうちょ」を演奏した。11時よりプレイルームにて病棟全体のクリスマス会が行われた。「手あそび“サンタクロース”」「プチハンドベル（保育士と幼児）」「ペーパーサート“おすしのピクニック”」「ハンドベル（保育士と学童）」「プレゼント渡し」という順序で進められた。

考察：クリスマス会は年間病棟行事の中で特に大きな行事だった。プレイルームでのクリスマス会はプレイルームにいくことができる全ての入院児と、医師、看護師も参加した。まず、手あそびをして全員で楽しく歌い、プチハンドベルでは、幼児が設定保育の中で練習してきた成果を発表した。ペーパーサートの“おすしのピクニック”はNHK「おかあさんといっしょ」の11月の歌で、乳児にとっても人気があった。保育士と学童によるハンドベルは、難しい曲を演奏したため、練習のときは各自色々な苦労もあったが、本番はとてすばらしい演奏を披露していた。このように、保育士が計画したプログラムは病棟のすべての年代の入院児が楽しめるようになっていた。また保護者も一緒に参加し、入院児たちの生き生きとした表情をみて喜んでいて。学

童が参加できた背景には、わらび学級（訪問学級）の先生の協力もあった。入院児も保護者も医療者も一緒に楽しめたクリスマス会であった。

(9) 節分

学童主体病棟・内科外科混合病棟への訪問保育が行われたため2つにわけて記した。

①日時：2004年2月3日 10:55～11:30

場所：血液主体病棟の幼児病室（参加幼児3人ともクリーンカーテンに入っていたため）

対象：血液主体病棟の入院幼児（乳児・学童も見学参加）

内容：病棟全体の節分行事の前に、クリーンカーテンの乳児のところで豆まきを行った。終了後、節分の行事が幼児病室にて行われた。「ハンドベル“まめまき”“ちょうちょ”」「鬼のお面をつけてダンス“赤鬼と青鬼のタンゴ”」「鬼の玉入れ」「豆渡し（各入院児にそれぞれ豆を配った）」「ハンドベルとダンスは練習の成果が発揮されていた。鬼の玉入れも皆一生懸命行っていた。

考察：乳児のところでの豆まきは、保育士が作成した鬼を登場させ、それにむけて豆（折り紙でつくったもの）を投げた。保育士は情緒面を発達させるため、わざとこわい鬼を登場させ乳児の反応を見ていた。受持ちの看護師は保育士がまわってくると業務を止めるなどして協力的であった。幼児病室での節分は、ハンドベルとダンスの練習の成果が発揮され、はじめは保育士の振り付けを恥ずかしがっていた入院児から終了後に「もう一回踊りたい」という声をきいた。

②日時：2004年2月3日 15:30～16:30

場所：学童主体病棟・内科外科混合病棟

対象：学童主体病棟・内科外科混合病棟の入院児

内容：血液主体病棟の保育士2名が午後から別の病棟に訪問保育を行った。「ハンドベル“ゆき”“まめまき”」「鬼の玉入れ」「鬼に豆をまく」「豆入れを折り紙で作成」の順序で行われた。

実践：保育士2名とともにハンドベルの演奏をした。事前に、画用紙に歌詞を書いて持参し、ハンドベルをしながらみんなで一緒に歌えるように準備をした。

考察：病棟に保育士はいなかったが多くの乳幼児が

入院していた。病棟全体が保育士の訪問を楽しみに待っていたようだった。特に入院児は、保育士と一緒に折り紙を折る姿がとても楽しそうであったため、私はこの病棟の保育士の必要性を感じた。

(10) おひなまつりクッキング

日時：2004年3月3日 10:00~11:30

場所：血液主体病棟内食堂・各病室

対象：血液主体病棟入院乳幼児・学童

内容：おひなまつりの行事としてクッキー作りを行った。参加入院児全員がエプロンと三角巾を身につけ、しっかりと手洗いをし、衛生面に注意を払った上で、保育士の指導のもと行われた。クリーンカーテンの入院児はベッドサイドにて行われた。

実践：5歳女児と3歳女児のベッドサイドにて、3人でクッキー作りを行った。5歳女児はとても楽しみにしていたようで楽しそうに作っていたが、3歳女児は当日体調が良くなかったようで参加するのを拒否していた。型抜きをすすめると、最初は拒否していたが、一度やってみると、「ペンギンさんだね」「あひるさんだね」と今まで拒否していたことが嘘かのように笑顔でクッキー作りをしていた。自分で型抜きをしたクッキーが焼きあがると、嬉しそうに食していた。普段食欲のない入院児もたくさんのクッキーを食しており、食の楽しさを味わっていた。

考察：衛生面での注意が必要な血液主体病棟で、調理の行事が行われた背景には、病院スタッフの協力が不可欠であった。保育士は、刃物を使用せず、またなるべく直接素手で触ることのないように生地をこねるときは、透明のビニール袋にいれるなど工夫をしていた。材料もなるべく少なく済むように栄養課と相談をしていた。また、事前に保護者へ通知し、当日は保護者の協力も得ることができていた。普段食欲のない入院児も、自分がつくったという喜びから、たくさんのクッキーを食しており、食の楽しさを味わっていた。

第2節 設定保育実践

月曜日から金曜日の11:00~11:40に行われていた。原則、幼児の設定保育はプレイルームで行われていたが、クリーンカーテンの幼児が参加する場合は、

全員幼児病室で行っていた。乳児の保育は主にクリーンカーテンにはいつている際、ベッドサイドで手遊びをしたり、絵本の読み聞かせをしたりしていた。

幼児の設定保育では、主にのり、はさみなど様々な道具の使い方を学んでいた。その他、季節の行事の準備としてその行事にちなんだものを作成していた。

ダンスが保育にとりいられることもあり、体を動かすことは入院児にとって情緒面の発達やストレスの発散にもなり皆とても楽しそうに踊っていた。クリーンカーテンなどでベッドから出ることのできない入院児には、上半身のみダンスを行うなどして、それぞれの入院児の持っている感覚をできるだけたくさん刺激できるようになされていた。

保育士の行う手遊びを好む乳児が多く、設定保育の途中に泣き出しては保育士が手遊びをすると泣き止むといった場面が多く見られた。保育士は保育中常に乳児を見ており、乳児がなぜ泣いているのかを理解し対応していた。

また、幼児の発達面をしっかりサポートするため、幼児に様々な経験を促していた。血液主体病棟の入院児は特に感染面で注意が必要なため、様々な制限がなされ指先の触感の発達が鈍くなる可能性が高い。そのことを防ぐために設定保育で様々な素材のものをを用いていた。

以上の考察や保育士の設定保育観察から、以下のような保育計画を立て、設定保育の実践を行った。

テーマ：〈カラフルかたつむり〉

内容：事前に準備しておいたかたつむりの形のみ入院児に渡した。そして、指に絵の具をつけてかたつむりの渦の部分に自由に描かせて、顔も自由に描かせた。

ねらい：“指に絵の具がつくことを気にせず楽しむ”
“雨の多い梅雨の時期を自分なりのかたつむりで楽しく過ごせるようにする”であった。

参加入院児：4名（2歳女児、3歳女児、5歳女児、学童女子）

保育に参加する入院児の年齢が様々であったので、その発達段階がよくわかる作品ができた。難しかった点は、作成中にどこまで口を出してよいのか？ということと時間配分であった。低年齢の入院児には始める前にもっと説明をしたらよかったと思った。しかし、実際に保育を行うことで参加する入院児を考えた保育計画の難しさが理解でき、観察だけではわからなかった入院児の特徴を把握することができた。

第3節 それ以外の保育実践

1. バイオクリーンルーム (BCR) での保育:

移植手術で BCR に移った血液主体病棟の幼児には、保育士が訪問保育を行っていた。入院児が BCR に移る際、その他の入院児は励ましのビデオレターを作成していた。入院児は完全な隔離状態にあり、入院児は普段の入院生活よりもストレスを感じていた。保育士が現れると嬉しそうな顔をしたのが印象的であった。BCR ではできる範囲で血液主体病棟と同じ内容の設定保育を行っていた。訪問のタイミングについては、受持ちの看護師と相談をしながら決められていた。

2. 入院児と遊びを通しての日常での関わり:

プレイルームや病室にて設定保育時間外において、乳児に対しては、手遊びや絵本の読み聞かせを行った。一番関わりの多かった幼児とは集団でゲームをしたり、1対1でパズルをしたりして一緒に遊んだ。年齢が様々な入院児と一緒に遊ぶために援助の必要な入院児と同じチームになって遊ぶなどして子ども同士うまく遊べるように努めた。学童とは病室にて一緒に勉強をしたり、色々な話をしたりして関わりを持った。また各病室への食事やおやつ配膳や介助を通して、保育士が行う行事を通して病棟全体の入院児と接することができた。

第4節 考察

保育士の設定保育時間以外での入院児との関わり方:

保育士は入院児と信頼関係を築くことに重点をおいていた。それは主に設定保育の時間以外で行われていた。朝のカンファレンス終了後に必ず乳幼児に朝の挨拶をし、入院児の様子を把握し、元気そうであれば朝食後プレイルームへ誘導し、自由遊びの中でさらなる信頼関係を築き上げていた。また入院して間もない入院児に対しては、まずその入院児の特徴を捉えることに重点をおいて、受持ち看護師との情報交換や入院児の保護者との面談を行っていた。保育士は1対1で入院児との信頼関係を築き、その上でプレイルームに誘導するタイミングを決めていた。そのようにすることで、入院環境に不慣れな入院児を徐々に慣れさせ入院生活における QOL の向上を図っていた。

病棟内での医療者との連携・協力体制:

月曜から金曜の毎朝、日勤の看護師によるショートカンファレンスに参加し、その場で入院児の状態を把握し、その他必要な詳しい情報は受持ち看護師から得ていた。保育士からは保育行事のアナウンスも行われ

ていた。入院幼児に関しては、毎週木曜日の午後から保育カンファレンスが行われていた。そこでは、看護師から入院児の疾患の内容・状態が伝えられ、保育士からは発達面関することや話し合いの対象となっている入院児の好きな遊びや同年代の子ども同士での関わり方が伝えられていた。このカンファレンスによって、看護師・保育士両者の視点から入院児を見ることができ、今後の方向性の確認がとれることで病棟スタッフ同士の混乱が起こることなく一貫した対応ができていた。看護師と保育士はとても良い関係を築けていた。

循環器主体病棟における保育:

疾患によって保育内容も異なるのではないだろうか? という疑問から循環器主体病棟における保育の観察を行った。循環器 A・B 両病棟共通であったのは、筆者が観察に訪れたときは入院児に乳児が多く、保育内容も乳児を対象としたものであった。循環器主体病棟は血液主体病棟に比べると入院期間が短期であることで、保育に参加する入院児の把握が難しく保育計画が立てにくいとのことであった。そのため、設定保育では一回で終了できるような内容のものが用意されていた。血液主体病棟では、昼食・おやつ配膳を保育士が行っていたが、循環器主体病棟では保育士が各病棟に1名ずつの配属であること、循環器主体病棟入院児は食事の水分カウントの方法が特徴的であることなどから看護師が行っていた。循環器主体病棟での保育士の観察を行えたことで、疾患によって保育士の業務内容に多少の相違があることや朝のショートカンファレンスが全員では行われずチームごとで行われることなど医療体制の相違も学ぶことができた。

第4章 保育実践をもとにした病棟の保育士に関する考察

この研究にはいる前、病棟の保育士とは設定保育で行われているような保育をしているのみの存在という印象を抱いていた。しかし、実際病棟での保育士は設定保育時間以外でも入院児と積極的に関わり、病棟スタッフの一員として欠かすことのできない存在であった。保育士の配属の目的は入院児の QOL の向上であるが、まさにその通りであった。

今回の実践研究で見出したことは以下の3点である。病棟内での保育士の存在価値とは①「入院児にとっての存在価値」②「医療者にとっての存在価値」③「入院児の保護者にとっての存在価値」の3つの側面

を持っていた。

①「入院児にとっての存在価値」で、乳児・幼児・学童で共通していたことは病棟のスタッフでありながら痛いことをしない人という存在であったことである。このことは辛い治療に耐えている入院児にとってとても大切なことであると考えられる。まず、乳児は手遊びや絵本を読んでもくれる人として認識していた。幼児は楽しい保育をしてくれる人、一緒に遊んでくれる人、新しく楽しい遊びを教えてくれる人と認識していた。また食事の時などは保護者が面会に訪れなかった場合に傍にいてくれる人、そして自分が悪いことをしたときにはきちんと叱ってくれる人として認識していた。学童は、居心地の良い場所として保母室を訪れ保育士に治療に関する話をしたり、学校での話をしたりと主に話し相手として認識し、また保育の準備を手伝ったりもしていた。

②「医療者にとっての存在価値」とは、保育士が病棟に存在することが医療者にとって必要と感じることである。看護師は入院児とゆっくり遊んであげたいという気持ちを持っているが、業務内容が膨大でとても忙しくしておりプレイルームに保育士がいることが持つ意味はとても大きいと感じた。季節の行事やお誕生日カードの作成など保育士が存在しなければ看護師が行うことになる。しかし専門家である保育士が行うことにより看護師は自らの専門である看護に集中することができていた。

③「入院児の保護者にとっての存在価値」とは、入院児の保護者が保育士を必要であると感じることである。入院児の保護者は保育士との何気ない会話を通して子育てについての話をしていた。また入院児の治療に関して、保育士は全く関与していない病棟スタッフ

として今まで見てきた入院児の様子などを心配そうに聞く姿が見られた。その他、保育士と保護者の面談が実現されたことで、保護者からは入院生活への不安や入院児の特徴を伝え、保育士は保護者から入院児に関する情報を得ることで、病棟スタッフでは知り得なかった入院児の特徴を把握することができていた。

保育士・医療者・入院児の保護者の三者はカンファレンスや面談を通して、入院児のQOLの向上に努めていた。

保育士は入院児から見ても、医療者から見ても、入院児の保護者からみても病棟内において欠かすことのできない存在である。

今後、入院児にとっての存在価値、医療者にとっての存在価値、入院児の保護者にとっての存在価値について考察していく予定である。

参考文献

- 高野 陽, 西村重稀 (編著), 体調のよくない子どもの保育, 北大路書房, 2004
- 高橋みゆき, 小児病棟における保育士の役割, 医療と保育, 2003
- 大野尚子, 病棟保育士の活動 (1) 小児病棟における病棟保育士の活動, 小児看護, 2001
- 岸本弘子, 鈴木理恵, 小児病棟における病棟保育士の役割—ある病院の小児内科病棟の事例から (その1), 立教女学院短期大学紀要, 2002
- 病児の遊びと生活を考える会, 入院児のための遊びとおもちゃ, 中央法規, 1999
- 高橋みゆき, 大平美紀, 病棟における保育士業務とその活動について, 小児看護, 2001
- 神戸理美, 堀内けい子, 中村崇江, 専門性とチーム医療の展開を中心に, 小児看護, 2001
- 山本和子, 大橋祐子, 高田早苗, 村谷圭子, 小児専門病院における病棟保育士の活動, 小児看護, 2001